

11 長谷観音(はせかんのん)

■山岳仏教の道場

養老元年（717）に、大和長谷寺の旅僧であった道德上人が創建したと伝えられ、初瀬山補陀洛院（ふだらくいん）と号し、山岳仏教の道場として大いに繁栄したといわれています。

「県指定 長谷観音像(はせかんのんぞう)」の説明板。

「長谷寺は養老元年(717年)、大和長谷寺の徳道上人が諸国行脚の途中この地に立ち寄り、建立したと伝えられている。大永2年(1522年)の大火により、寺は宝物・古文書などをほとんど失ったが、三尊像は頭部のみが無傷で残った。

都於郡城第7代城主伊東尹祐は寺院の再興をはかり、伊東氏累代の祈願所として再び寺は栄えたが、伊東氏の滅亡と共に次第に荒廃し、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）によって明治4年（1871年）に廃寺となった。

明治11年（1878年）、地元の人々によって堂宇が再建されたが、昭和20年（1945年）の枕崎台風によって再び倒壊。しかし、このときも三尊像の頭部は無傷で残った。現在の堂宇は昭和56年（1981年）地元の人々の浄財により再建されたものである。

指定日：平成14年3月28日指定。所在地：西都市大字三納 長谷。本尊十一面観世音像 高さ6m。脇侍：聖観世音菩薩像 高さ5.5m、勢至菩薩像 高さ5.5m。

西都市教育委員会」



12 山路毘沙門天(やまじびしゃもんてん)

■戦勝祈願の毘沙門天立像

毘沙門天(びしゃもんてん)は多聞天(たもんてん)とも呼ばれ、四天王の一つであり仏教の守護神でしたが、次第に独立して信仰の対象として崇められるようになりました。

都於郡城第13代城主伊東三位入道義祐が、都於郡城北方守護の神として京都鞍馬寺から勧請して、上山路寺を造ったときに持ち込まれた本尊と考えられています。

この寺は真言宗仁和寺派に属していましたが明治4年に廃寺となり今日に至っています。

「鞍馬寺毘沙門天顕彰碑」より

「所伝によると都於郡城主 伊東義祐公は、北方鎮護のため、この地が都於郡城の真北にあたることから平安京の北方守護神、鞍馬寺本尊毘沙門天のご分霊を勧請して山路鞍馬寺を建立、富貴栄と武運を祈願した。

この寺は真言宗仁和寺派に属していたが明治4年に廃寺となり今日に至っている。なお義祐公は戦国武将の常道であった京好みにならい都の文化を西都、佐土原地方にもたらした城主でもある。

この鞍馬寺の本尊である毘沙門天立像(1.9m)は室町時代後半頃に作られ極彩色の鎧(よろい)を着用して右手に宝棒を持ち左手の上には宝塔をささげ足下に天邪鬼を踏んでいる。そして脇侍として左右に吉祥天像と弁財天像が配されている。

また都於郡城の伊東氏はこの山路の鞍馬寺とともに三納の長谷寺(はせでら)に対して尊崇の念が厚かった。このように毘沙門天像とその脇侍像は都於郡伊東氏の残した文化遺産としては極めて貴重であり、今後ともその保存顕彰に努めなければならない。

昭和62年4月吉日 西都市妻町住人 日高正清 記



毘沙門天に行くには、険しい山路をたどらなくてはなりません。鞍馬寺が真言宗であったことから、途中の参道にお大師様(空海)関係の石仏などが数多くあるものと思われます。



13 杉安峡(すぎやすきょう)・杉安井堰(すぎやすいぜき)

■日向の嵐山と称えられた絶景

杉安峡(西都原・杉安峡県立自然公園)は一ツ瀬ダムの下流にあたり、深い峡谷となっていました。かつては「日向の嵐山」と称され、兩岸を覆った深緑が川面に映え、屋形船が浮かび、旅館や料亭が並び多くの観光客が訪れていました。

一ツ瀬ダムができたことで水量が減り、流れも濁って往年の面影はなくなっていますが、それでも川面に映る杉安峡の緑と悠然とした川の流れは訪れる人の心を癒してくれます。

米良街道(国道 219 号)の要所であるこの辺りは、米良山から筏に組まれて運ばれてきた木材の集散地として賑わい、また鉄道が敷かれると、杉安駅周辺には製材所が集中していました。現在鉄道は廃止されていますが、一ツ瀬川沿いに上流へと向かう国道 219 号(米良街道)からの眺めは格別で、新たな観光の魅力となっています。



杉安橋上流の杉安峡



杉安橋下流の杉安峡

■農民の困窮を救った杉安井堰

現在の杉安頭首工（旧杉安井堰）は、杉安橋下流にあたり西都市役所から国道 219 号を約 5km 北上した位置にあります。

元禄 2（1689）年に穂北の庄屋の息子として生まれた児玉久右衛門は幼少より気性が強く義気に富んでいました。穂北は天領でしたが延岡藩の支配下で、年貢は米でおさめなければなりません。この地一帯は水利の便が悪く、また水田も少なかったため農民の生活は困窮し、泣く泣く先祖伝来のこの地を去っていく農民もあつたを絶ちませんでした。

この状況を見かねた久右衛門は米良川（一ツ瀬川）より水を引き、用水路の開削によって水田を造成しようと企てますが、資金難で事業はなかなか進まず辛酸をなめる日々が続きました。

このような中、さる宮崎市の篤志家の出費で工事に取りかかりますが、引水口付近の住民の水害を恐れての反対や、数度の水害に計画は何度も頓挫しかけました。

これらの難関を克服し、享保 7（1750）年に第一期工事で 14 町歩、寛永年間の第二期工事で 80 町歩を開田し、後に用水路の延長で面積は 600 町歩を超えるに至りました。

昭和 48（1973）年から 52 年にかけて近代的設備の現在の頭首工が完成しました。

久右衛門の大事業に村民は深く感謝し、毎年 11 月に慰霊祭が執り行われています。



14 速川神社(はやかわじんじゃ)

■一つだけ願い事を叶えてくれるお祓いの神様

杉安橋を渡り、一ツ瀬川沿いに国道 219 号を数キロ行くと速川神社入り口です。鳥居をくぐり、対岸に渡って約 870m の急坂を登り歩くと神社が現れます。

ここの神様は願い事を一つだけ叶えてくださる神様として知られています。

御祭神はセオリツヒメなど四柱で、罪や穢れが祓われることで福が授けられるとされています。商売繁盛・病氣平癒・豊作祈願・受験合格など参詣者が多く、特に受験シーズンには大勢の参詣者が訪れ、親子での参詣も多く見られます。



国道 219 号沿いにある右写真の鳥居をくぐり、橋を渡って対岸に進みます。本殿まではウォーキングコースのようです。

祭神に願い事を届ける眷属の神が蛇体であるからか、古くから卵 2 個、灯明 2 本を供える独特の風習もあります。



■九州最大のアーチ式ダム

一ツ瀬ダムは、高さ 130m、堤長 416m、発電能力 18 万キロワットの規模を誇る九州最大のアーチ式ダムです。アーチ式ダムとは、貯水による水圧が両岸に伝わるように弓の形をしたダムで、谷が狭く岸壁と基礎岸壁が強固な場所に造られます。

一ツ瀬川の全延長の約 8 割は九州山地に位置し、険しい V 字谷をつくっています。この地形が電源開発には最適で、「槇ノロ」「村所」「一ツ瀬」「杉安」「大河内」の 5 発電所が建設され、総出力 22 万 2,600 キロワットの九州有数の水力電源地帯です。また、一次支川の三財川の上流部も急峻な V 字谷であり、「立花ダム」「寒川ダム」が建設され、約 2 万 2,000 キロワットの発電がされています。

昭和 33（1958）年に、九州電力の一ツ瀬ダムの建設が始まり、完成とともに旧東米良村 3 地区、西米良村 4 地区で 361 戸が湖底に沈みました。



一ツ瀬発電所展望台からの眺め

■器量が良くないために返された岩長姫の悲しい物語

ニニギノミコトは笠沙の御前でコノハナサクヤヒメを見初め妻にします。その際父のオオヤマツミノカミは姉のイワナガヒメも一緒に嫁がせますが、ニニギノミコトはイワナガヒメが醜かったので送り返してしまいました。

イワナガヒメは、自分が帰されたことを嘆いていた。あるとき、鏡を見ていると自分の顔が龍のように見えたので、怒って「もう鏡も見たくない」と、鏡を北西の方角に投げました。鏡は遠くに飛んでいき、旧東米良の龍房山（りゅうほうさん）の頂上にある大木にかかり、日夜光輝き西方の村里を照らしたので、そこを白見村というようになりました。

イワナガヒメは鏡の行方を追って白見村まできて、そこに身を隠しました。後に村の長老が龍房山に登り、この鏡を山頂から下ろしてまつようになりました。白見村もこの鏡にちなんで銀鏡村と呼ぶようになったということです。姫の投げた鏡は御神体としてまつられています。

また、国の重要無形民族文化財に指定されている銀鏡神楽が伝えられ、毎年12月14日に夜を徹して33番の舞が奉納されます。神面は、江戸時代初期の作品といわれています。



■米良氏

米良地方は椎葉とともに九州の秘境とされてきたところで、この地方を古くから領していたのが米良氏です。米良氏は、南北朝動乱期に官方の勇将として奮戦した肥後の菊池氏の後裔ですが、米良に移り住んだ年代は定かではありません。（一説によれば、15世紀はじめ懐良親王（かねよししんのう）の子良宗（よしむね）を奉じて入ったという）。当初、竹原村元米良に住んだので米良氏を称し、山中14ヶ村（旧東米良、西米良、寒川）を領有したと伝えられます。江戸時代には、徳川家康の旗本となり、人吉藩に属しながらも交替寄合家（知行高は旗本並みであるが、老中の下に属し譜代大名に等しい処遇）として、5年に1回参勤しました。

米良氏の居城は、銀鏡や村所にあったこともありましたが、江戸時代には小川村に定められました。

明治2年に、米良第17代米良主膳則忠公が米良姓から旧姓である菊池姓に復しました。明治4年の版籍奉還にあたり、所有する山林地を全て領民に分配して生活基盤を安定させました。当時、他の藩主の多くは、政府に返上していることと比べると、則忠公の処置は特筆に値します。則忠公は子弟の教育にも力を注ぎ、文久元年（1861）に「弘文館」を開くなど、村民のよき指導者でもありました。

昭和8（1933）年、西米良村、東米良村から浄財を集め、村民の奉仕によって菊池御別邸（現在の菊池記念館）が建設され、米良氏20代の菊池武夫氏に贈られました。

■米良街道

米良街道は、佐土原～尾泊（西都市）間を米良往還、尾泊～人吉間を球磨往還といいます。佐土原から柳瀬（新富町）、黒生野（西都市）、右松（西都市）、妻、穂北、杉安から峠道に入る道筋と、佐土原から鹿野田、平群を経て札の元に行き、三納城址の麓を通り長谷観音の参道を兼ねた峠道に入る2つの道筋があり、笹の元で重なって宿場と茶屋のある尾泊を目指しました。

一ツ瀬川溪谷の県道ができて荒廃しましたが、この道筋に長谷～児原広域林道が建設されており、旧街道をしのぶことができます。

天正5（1577）年、伊東氏の豊後落ちでは長谷あたりを通っており、寛政4（1792）年には高山彦九郎が湯前から横谷峠を越えて日向国に入っています。

現代の米良街道は、宮崎市から熊本県境までの国道219号を指していますが、この道は明治37（1904）年に通じた杉安～村所間の県道です。当時の道は、大半が一ツ瀬ダムのお湖底に沈んでいます。

■一ツ瀬川

一ツ瀬川は、熊本県との県境をなす市房山（1721.8m）周辺の山地を源流域として東流していきます。急峻なV字谷を形成する上流部では板谷川、小川川、銀鏡川、尾八重川などの支線が合流し、杉安峠を抜けて宮崎平野（日向海岸平野）に入り、三財川、鬼付女川などの支川が合流して日向灘に至ります。全延長91.3km（宮崎県第4位）、流域面積852km²（宮崎県第5位）、支川数59本（三次支川含む）の2級河川です。